

5. シーラントに関する実験的研究 ー辺縁封鎖性と裂溝浸入度についてー

○ 柏木伸一郎（福岡市・小児歯科柏木医院）

立川 義博，平野 洋子，中田 稔

（九大・歯・小児）

現在，臼歯部咬合面のう蝕予防としてシーラント法が，広く用いられるようになってきた。シーラントの予後を左右する要因としては，歯質との接着性・シーラントの磨耗性・辺縁封鎖性および小窩裂溝への浸入度などが考えられる。そこで今回，特に辺縁封鎖性と浸入度について実験的に検索を行った。

資料は，咬合誘導上の理由で抜去した，健全あるいはエナメル質う蝕までの上下顎小臼歯とした。シーラント材としては，3M社製ホワイトシーラントの化学重合型と光重合型の2種を用い，日常臨床で一般的に行なわれている3種類の歯面清掃法を比較した。

実験方法として，シーラント填塞後サーマルサイクリングを行い，0.5%塩基性フクシンによる色素浸透試験を行った。その後，資料を頬舌的に切断し，実体顕微鏡で辺縁封鎖性の観察を行った。さらに，0.5%メチレンブルーによる染色を施し，シーラント材の小窩裂溝への浸入度を観察したので報告する。